



2003年6月28日(土)開催公開講演会報告：「カトリックにおけるキリスト教教育のあり方について」講演者； イシドロ・リバス / イエズス会司祭

著者	手塚 奈々子
雑誌名	あんげろす：明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
号	32
ページ	2-3
発行年	2003-09-30
URL	http://hdl.handle.net/10723/348

2003年6月28日(土)開催公開講演会報告

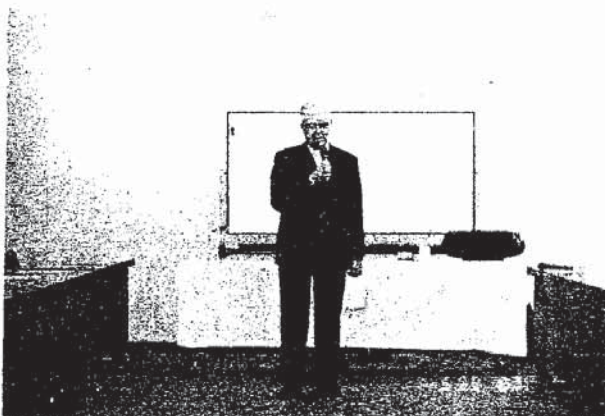
「カトリックにおける

キリスト教教育のあり方について」

講演者；イシドロ・リバス／イエズス会司祭

手塚 奈々子

キリスト教研究所では、キリスト教主義教育を数年に渡って共に研究し話し合ってきたが、今回はカトリック教会のイエズス会司祭イシドロ・リバス氏をお迎えして、「カトリックにおけるキリスト教教育のあり方について」を講演して頂いた。



講演者の紹介であるが、イシドロ・リバス神父は、1929年スペインのバルセロナに生まれ、1946年イエズス会に入会、バルセロナのサン・フランシスコ大学で古典文学、哲学両修士号を受ける。1954年来日。上智大学で神学修士号を受ける。その後37年間上智大学で宗教学とラテン語を教える。この間ザビエル寮寮長、CLCとMEの代表責任者、聖イグナチオ教会助任司祭を歴任。現在、イエズス会霊性センターにて執筆活動、黙想指導の仕事を中心に活動する司祭である。リバス神父の著書は、「日本の大学生」読売新聞社、「日本人とのおつきあい」コルベ出版社、「二人の自分」女子パウロ会、「孤独を生きぬく」講談社現代新書、「ミサ 神の愛の確認—不安から希望へ—」新世社、「傷ついた家庭こそ神の愛の中に」新世社、「祈りを深めるために（その1）—自分の人生の中で—」新世社、「祈りを深めるために（その2）—愛された罪人—」新世社、「祈りを深めるために（その3）—我が主イエス・キリストの内的認識—」新世社、「祈りを深めるために（その4）—現代人の苦しみとキリストの受難—」新世社他、また、論文は、「上智のルーツの根底にある聖イグナチオの霊操」『イエズス会教育のこころ』みくに書房所集他、なお解放の神学を研究しておられ、編著「現代世界と暴力革命」中央新書がある。

当日10数名の出席の中、所長の挨拶と講演者紹介の後、リバス神父の講演が始まった。リバス神父が宣教師として来日された時からの日本人との関わり、宣教における困難及び喜び、そして37年間上智大学でラテン語と宗教学を教えてきたその教育方針及び経験がまず話された。そして20世紀の第2ヴァティカン公会議の方針（「御言葉と聖霊は宣教師より先に来ている。」「皆キリストを必要とする。」「キリストは人間の憧れそして元型である。」日本人の良い所を殺すどころか、「浄め、引き上げ、完成させる。」「キリスト教信仰は、外からのものではなく、中から生かしていくものである」）及びパウロ6世の回勅（「御言葉を現代人のメンタリティー、感受性と文化に

合わせて適応することが福音宣教者の責任である」)が紹介された。大学教育については、リバス神父の上智大学での宗教学の授業のシラバスが配布され具体的に話された。リバス神父は、授業の初めに前の授業のリアクション・ペーパーをまとめて伝え、テーマ(キリストに至る道等。リバス神父は、孤独、不安、空しさ、罪悪感、大自然の神秘等の具体的な諸問題からキリスト教の諸テーマに導く)を発展させて講義する。その後小グループで話し合いをさせ、その日のテーマに関する聖書及び参考文献を紹介し、10分間音楽を聞かせ説明しながら黙想させる。最後にその授業のリアクション・ペーパーを書かせる。この宗教学の授業内容が話された時、実際に講演会でも音楽を流し、解説をつけながら黙想させるというリバス神父の方法が具体的に実施された。参加者の中から多々質問が出されたが、イエズス会という修道会の「それぞれの個性を生かして授業に望ませる」という方針も話された。講演会終了後も、参加者数人とお茶を飲みながら、日本のキリシタン時代の宣教師等の話を交えたカトリックにおけるキリスト教教育について意見交換され、有意義な時間を持つことができた。

(てづか ななこ 所員・社会学部助教授)